

サイクリングしポート

岩根 泰彦

書き出しはどんな言葉にしようか。などと内谷が頭に無いのだから考えてみると、やたらと時間か経ってしまう。書き始めてしまえば、どうにでもなることはわかっているのに、こんな事に頭を悩ますのは奥にバカリカしい。そこで、小椋佳のカセットを見て、「春の雨はやさしいはずなのに、面の空だけがシクラメンのかほりらしくしようか」と思ってみて、再び時間を費やす。だいたい、こんなアホなことに紙面を使う余裕があるのか、すうめからない。空の「岩根さん、ちゃんと書いてよー」と、金谷の「あのー、早く書いて下さい。しが耳から離れず、+

六日の十一時、かじかむ手を温めながら、ぶつけ本番を書き始めたわけだ。従って、紙面の関係、眠けの関係で、いつ果てるとも知れない。危険と矛盾と男のロマンと、そして誤字・脱字に満ちたしポートが良作するはずだ。

サイクリングの事を書こう。とにかく去年は金が無かった。どういう関係かと向かわるかも知れないが、奇室の前大置き去りにされた私の自転車を思えばわかる。十月が十一月、暗い夜道を家に向けて走っているとき、昨日までは無かった工事による直角の段差があって、そこにタイヤをすって転倒したのである。私はハンドルを飛び越えて、歌舞伎俳優を思いながら二、三步前へ歩いて済んだが、自転車はリムがぶにやぶになくなって、それ以来、奇室の前に足着

している。

曲がりなりに、四年ともなると暇かな。

自転車が健在でも、特に結晶ちゃんを作って

いると、そう長く東京を離れるわけにもいか

ないし、他に何かと卒業を控えての用事があ

ったりする。そこで、あまり出掛けない。自

転車が盗まれた、などという決定的な事があ

った。一昨年は別格として、昨年は全く憂鬱な年

であったと思う。金なし、暇なし、ついでに器

量なし、三拍子揃って無い。こういう男も珍ら

しい。

……山はサイクリングレポートです。……
と言うわけで、少し走った事を書く。

まず昨年の走り初めは、春休み、宝谷・鈴

木・栗原の三人に居候したうらんだ。またこの三

人が「ミメトリオレ」が、「スズクリホウレ

などと、けったいな名前と呼ばれていた時代の

話である。私は都合で三氏に雇われて出発し、一

人黙々と峠を目指して走った。きのうまで

彼らが宿泊していたはずのユースを横目で見、

高校卒業の時に来た、懐しの七滝への道を眺め

ながら走った。そして、ツヤリ道に入って、力

尽きた。三十分の睡眠時間と、永いフラウニング

ひひいたか？、ここを言っておくけれど、君量

というのは願う事では決してない。それを行う

ことができる君かということ、それだけの力量

があるかということだ。決して願う事ではない

。というわけで、休んでいると、誰が後から走

ってくる。業の定、彼らが俺を見物している向に

、先になっちゃったのだ。鈴木のことほれるよ

うな笑顔が丘づいてくる。やがて宝谷に抜かれ

栗原が背後に迫った頃、天城峠に着いた。書き忘れたが、ここは伊豆半島である。この後、緒を見、ユースに迫って、翌日、サイクルスポーツセンターで遊ぶ。この肉の事情は、誰れかが書きたろう。そこで、私にとっても、たいへん得難い体験につけておける。転倒の話した。こう書くと、こいつは年がら年じゅう転んでいゝるのではないか、と思う人がいるかも知れない。当たらずとも遠からずだ。その私にとっても、これは不思議な事件なのである。軽快な下り坂を、かなりのスピードで走っていたら、思ってもいらいた。要するに、脇へ寄り過ぎて転ぶのだが、危いと思つた次の瞬間の記憶は、全く、完全に無い。気付いて思うと、坂の下の方を頭に、あお向けに寝ていた。そして、なぜか私の体の

上に、自転車が見事に乗っかっている。それだけならいい。奥に、その姿勢で路面を走っているのだ。思わず笑ってしまったが、コいつになら、たゞ止まるたさう。とか、コ人が見てたら、なんと思つたさうか。などという考えが頭をかへ巡っているうちに止まった。スピードが最後に来て急速に収束するのを、体で感じて、コウむ。こうなるのか。と、どうでもいいことに感心しながら立つ。幸い怪我は、若干のすり傷だけ。自転車は、私を犠牲にしたにけあって、当然無事。なぜさういつ状態になつたかは、想像することはできず、実感を伴ふなっている。次に走つたのは、七日の予備合宿である。このランにつけて書くのは、あまり気が進まない。書くことがあまり無い、と言ふは、確かとい

うでもある。いくらでも有るじやないか」と言
めれても、無言の肯定を与えられる。しかし、
書けることを書くと、要するに、人格を疑われ
てしまう可能性があるので。このラジコで非常に
特徴的なのは、黒髪もいじ、多くの人間が参
加してゐるのだが、ほとんどの思ひ出の中に、
沢木がひょっこりと顔を出して、「カヤバキ
スネ」と、わけのわからぬことを私に話し
かけてゐるといふことだ。

DOJITA

最後は、やはり七月、中央線の小諸に近い駅
から、地蔵峠に登り、鹿沢の客に泊まり、車坂
峠を下って小諸に帰つたラジコだ。もつとも、そ
れは結果で、しかも、完全ではない。

峠に登るのを、断念したのは、これが初めて
である。別に矛盾した話ではなく、二度下りし

「ラジコしたということだ。一度目は、食事をしな
かつたためか、電車で酔つてしまひ、降りてか
らも牛乳一本、パン一個が食へら山な状態。
否、むしろ強烈だったのは、カニカンと照る太
陽と、私を包んで、それ自体が熱を帯びてゐる
ような、雲一つないまっ青な空だ。私は、ヨレ
ヨレ、カサカサ半脱水してしになりながら、三
分の一程登つて、小諸まで逃げ返つた。決心を
先送りにするために、民宿に泊まる。翌日、心
が決まらなかつたに出發。しかし、足は峠に向
かっている。体調も昨日よりはいい。天も味方
してか、峠の上の方では小雨すら降つてきた。
あとは、最初に述べた通りだ。紙面が無いのが
残念だが、地蔵峠と車坂峠の間の林道は良かった。
オワリ